



南浜獅子神楽とは、明治時代の中ごろ、ニシン漁の栄華を夢見た富山県からの移住者によって南浜地区（メヌウシヨロ）に持ち込まれた郷土芸能の1つです。当初は、南浜の富士沼神社に奉納されていて、昭和43年鬼脇の北見神社に移されるまで南浜地区の娯楽として親しまれていました。

この神楽の演じ手は、囃子方^{はやし}2名、笛数名、獅子は6名（頭役1、胴幕4、しっぽ1）、天狗2名（大天狗1、タラの頭でできた天狗面をつけた「まねこき」と呼ばれる道化役の小天狗1）です。獅子の幕を持って舞う^{むかて}百足獅子の系統で、^{しんみなとしほうしょうづ}新湊市放生津が源流地と考えられています。舞は祈りから豊漁や感謝の舞にいたる10種類で構成され、豊漁を願う漁師町の舞としては数少ないものの1つです。

昭和43年に町の無形民俗文化財に指定され、保存会が結成されました。56年から鬼脇青年団を中心とした若獅子会が活動を担っています。そして57年には利尻小学校の教育活動の一環として少年団が組織され、現在は公民館活動として地域のこどもたちが舞の伝承に取り組んでいます。



初期の獅子頭



昭和34年鬼脇祭典での舞



昭和40年代の舞



こどもたちによる伝承